

『世界は二人のために』

著：ふゆの仁子

ill：海老原由里

「お前には……関係ない」

両手の拳を握り締め、堀江の胸を押し返そうとした。だが捕らえられたままの手は、解放してもらえない。

「——いいのか、それで」

堀江は低い声を出した。

「一生を崇生に捧げるのか」

「だとしたら、どうだっていうんだ」

凧は目いっぱい腕を振り払って、堀江から逃れる。

「俺がどう生きようとお前には関係ない。だから、放っておいてくれ」

「——放っておけない」

常に寡黙な男は、これまでに聞いたことがないほどに低く、そして苦しげな声を発した。

眉間には深い皺が刻まれ、への字型に結ばれた口が、微妙に歪んでいる。

額に浮かぶ汗と、落ち着かない様子で何度も開閉される拳が、彼の緊張の度合いを示しているように思えた。

苦しげな表情のまま真っ直ぐに凧の顔を見据え、ぐっと握った拳に力を込めている。

「俺は——初めて会ったときからずっと、お前のことが好きだ」

「堀江……」

冗談だろうと、笑って流せるぐらいならよかった。

友達同士ならではの、ノリや勢いだと言えるぐらいなら、よっぽど楽だったかもしれない。

でも凧はそのとき、表情を強張らせ、言うべき言葉を失っていた。

なぜなら目の前に立つ男が、無愛想で、無口で、さらにばかがつくほど生真面目で、機転を利かせたり、冗談を言ったりできないことをよく知っていたからだ。つまり堀江は冗談で凧相手に想いを打ち明けているわけではない。本気なのだ。

驚きはしなかった。なぜなら凧は、堀江が自分に向けてくる瞳の熱さに、とうの昔に気づいていたからだ。

「無理に好きになってくれとは言わない」

凧の困惑の度合いがわかっているのか、凧が返事を口にする前に、先を続ける。

「お前が誰を好きでも、誰に命を捧げようとしても構わない」

握った掌をさらに強く握り締め——そして。

「お前を、抱きたい」

何かに誓うように紡がれたその言葉が、凧の鼓膜を揺らした直後、逞しい筋肉に覆われた腕が伸びてくる。

何をするつもりなのか。頭で理解するよりも前に、後頭部に腕を回され、そのまま前に再び引き寄せられる。

逃げようと思ったときにはもう相手の顔が目の前にあった。

「凧……」

熱い吐息とともに囁かれる、妙に艶かしく聞こえる自分の名前に、背筋がぞくりと震えた。

これまで単なる友達としか認識していなかった人間が、突然に「男」になった。そして自分が「女」にされてしまった。

「好きなんだ」

低い声が攻め立ててくる。

心の奥底に封じている気持ちを抉り、それを表に出そうとしている。

「……堀江っ」

「一度でいい」

抗おうとして振り払った腕を、あっさり避けられてしまう。

近づいてくる唇が無理やり重なってくる。何度も見ている、何度も目にしているその唇の、思ったよりも熱く柔らかい感触に、凧は驚き、狼狽えた。

背中に回った逞しい堀江の腕が、小刻みに揺れている。

「この想いを遂げさせてくれ——」

懇願するような声が耳を掠めたあと、ざっと凧が鳴った。

重なり合った胸から伝わる心臓の鼓動が、これが夢ではなく、現実なのだと言われ続けている。

後頭部をかき抱(いだ)く手の動きが忙(せわ)しくなくなり、息ができなくて苦しくなる。必死に胸を押し返そうとするが、びくともしない。

力の差をここでまた痛感させられる。どれだけ本気になっても、まるで堀江には敵(かな)わない。そして思い知らされる。試合のとき、練習のとき、堀江が手を抜いていたという事実を。

何度かはこの大きな体を床に投げ飛ばしたこともある。仰向けに背中から落ちながら、この男はなんと言った？

『やっぱり凧は強い』

眉をハの字の形にして、打った背中を擦りながら、凧の伸ばした手を借りて立ち上がった。

『図体ばかりでかくても、いざというときに役に立たないと意味がないぞ』

凧のかけた言葉にはにかんだ笑みを浮かべ、『そうだな』と笑ったのは、それほど遠い昔の話ではない。

それはすべて、嘘だったのか。

堀江が本気を出せば、凧の首など簡単にへし折られてしまいそうだった。それでも堀江はいつも凧を賞賛した。堀江に褒(ほ)められて、悪い気はしなかった。初めて堀江の演舞を見た中学生のときから、憧れていた。自分にはないものをすべて持っているように思えて、羨ましかった。

堀江と一緒にいると楽しかった。

楽しかったけれど、怖かった。

「凧……っ」

切(せつ)羽(ば)詰(つ)った声で名前を呼ばれ、背筋がびくりと震えた。忙しい動きで、手首を掴んでいた堀江の手が下肢に移動し、脚の間に伸びてくる。

布の上を動く指の動きがリアルに太(ふと)腿(もも)に伝わり、過敏に体が反応してしまう。咄嗟に奥歯を噛み締め溢(あふ)れそうな声を堪えた。

「凧……好きだ。愛してる」

苦しそうに繰り返される言葉が、触れ合った唇の間に零れ落ちてくる。伸びてくる舌が上唇や歯を舐(なぶ)り、困惑する凧をさらに惑(まど)わせていく。

これまでに女性と戯(たわむ)れにしたキスとはまるで違う、濃厚で心の奥までを吸い取られるようなその勢いに、頭の中がくらくらしてきた。

堀江の熱を帯びた視線に気づいたのがいつか、はっきりとは覚えていない。だが気づいていながら、知らないフリをしてきた。

知らなければ、居心地のいい空間から逃れなくて済む。自分の気持ちを明確にすることもなく、ただ甘えさせてもらえるのだ。

でも、ぬるま湯の中で過ごしてられる時間は限られていた。

この先このままでいられるわけがない。自分も、堀江も。そして、崇生も。

だから凧は、堀江から逃げる準備をしていた。

自分自身をぎりぎりまで追い詰めて、甘やかしてくれる存在から逃れ、強くなろうと思った。

院に進むフリをしていれば、堀江はそれ以上何も聞いてこないだろう。卒業まで平静を装って、そして逃げるつもりだった——それなのに。

「凧……愛してる」

耳(じ)朶(だ)を擦る熱さに我に返り、渾身の力で、無我夢中に手を振り払う。その手は思い切り堀江の頬に命中して、鈍い音が空気を揺らした。

「……凧」

何が起きたのかわからないように、呆然と叩かれた頬に手をやったまま、堀江は凧を見つめていた。

「ばかなことを言うな——」

「ばかなことじゃない。俺は本気でお前のことを……っ」

「言うな」

堀江の言葉を遮るように、凧は叫んだ。

駄目なのだ。聞いてはいけない。両手で耳を塞(ふさ)ぎ、頭を左右に振った。

堀江の優しさに、これ以上慣れたくない。慣れてしまったら、二度と逃れられなくなる。

本文 p112～119 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>